

邵明園（著）《河西走廊瀕危藏語東納話研究》

廣州：中山大學出版社、2018 年、10+450pp.

鈴木 博之

1 本書の構成と総評

本書は中国甘肅省張掖市肅南裕固族自治県祁豊藏族郷に居住する東納 [mDung-nag] チベット族の話す方言（以下「mDungnag 方言」）の記述研究である。その内容は、概況 (pp. 1-21)、音声・音韻 (pp. 22-71)、形態統語 (pp. 72-319)、語彙 (pp. 320-360)、方言学上の問題 (pp. 361-371) に分かれ、さらに付録 (pp. 372-444) として語彙表、動詞の形態変化表、チベット文語形式（以下「蔵文」）に対応しない動詞の形態変化表、長編資料の訳注を含む。言語それ自体の構造の記述、語彙集、長編資料が含まれていることから、典型的な記述文法の体裁をとっているといえる。これに瞿霽堂による序文、目次、参考文献、あとがきが加わる。

本書の記述は基本的に記述言語学の方法論に基づいている。著者が述べるように、本書の記述部分に用いる言語データは、できる限り長編資料から採っている (p. 20)。これは記述言語学で受け入れられている 1 つの立場である。加えて、蔵文および文語との対応関係にも配慮した記述があり、チベット系諸言語の研究に必要な情報が盛り込まれている。蔵文との対応関係を明らかにする作業は通常歴史的、通時的研究の一部と理解されるが、チベット言語学（西田 (1970: xv) の記述を参照）の枠組みでは、この記述を含めることが有益とみなされる。これらは Häsler (1999) や Sun (2003)、Haller (2004) のようなチベット系諸言語の先行研究でも実践されている。本書はさらに、動詞の形態変化について蔵文との対応関係を体系的かつ詳細に記述・検討した部分 (pp. 312-319; 408-431) を含む。これは先に挙げた他の研究には見られない特徴であり、読者に益するものとなっている。一方、付録 1 の語彙表（非動詞）については蔵文の対応形式が各語形式に添えられていない。扱いが動詞と異なるのは、資料的価値から見れば残念である。

本書の書名が示しているように、mDungnag 方言は危機方言に属する。その意味で、その言語体系を把握できるように設計された書物が出版されたことは歓迎され

るべきであり、またその資料的価値も高い。一方、本書の複数の箇所、記述と内容に齟齬がある部分や用語の不統一など、出版に当たって十分な校正を行ったとは認められない部分があるのは残念である。たとえば、動詞の形態変化のカテゴリーは、本文中では〈完成体〉¹、〈未完成体〉、〈命令式〉となっている (pp. 112-113) が、付録2では〈過去〉、〈非過去〉、〈命令〉となっている (pp. 408-431)。また、付録1の語彙リストの冒頭 (p. 372) に「本リストは『非動詞』と『動詞』の2種類に分ける」と述べているが、実際は付録1には「非動詞」が、付録2、3に「動詞」が割り当てられている。このような事例は明白な欠点ではあるが、本書の記述の理解を妨げるものではない程度であることも述べておきたい。

本書評では、著者の mDungnag 方言の具体的な記述と分析の部分について全体的に検討を加え、評者の考えを合わせて述べていく。以下、音声・音韻、形態統語に分けて記述する。

2 音声・音韻

mDungnag 方言の音声・音韻に関する記述は第2章で行われ、共時的記述、歴史的变化、特殊な変化、連続音変化の4節からなる。その表記方法は音標文字を用いた音韻表記である。実際の音声に近い音標文字が選ばれ、かつ初頭子音群については上つき表記を用いるなど、子音連続間の各音素の主従関係が明確になる表記法を用いている。

mDungnag 方言の単子音の体系 (p. 23) を見ると、著者は前鼻音つき有声阻害音 (主たる子音に先行して ‘n’ で標示) および円唇化音 (主たる子音に続いて ‘w’ で標示) を「単子音」として認めている。これによって音節構造が単純に記述できるが、たとえば、子音連続の先行子音に一連の前気音を認めているのに、なぜ前鼻音だけが単子音となるのかについて、説得力のある解説はない。ただし、p. 71 に著者が前鼻音つき子音が単子音であると考えの根拠を挙げている。円唇化音については、それと対応する非円唇化音が交替する例が少なからず存在し (pp. 58-61)、本書の記述では初頭子音それ自体が交替するという分析になる。ʷ を渡り音として独立したスロットを認めれば、ʷ の脱落の有無として理解することも可能である。また、著者は別途 m^j を子音連続として取り扱っている。^j は厳しい共起制限があるということであるから、m^j は単一音素ではないという分析であろうか。著者はこのような問題について、自己の分析方法をもっと丁寧に解説すべきであっただろう。また、母音の長短の対立は存在しないと述べている (p. 29) が、本書を通して見れば、多くの

¹ 本書評では、原文の用語・表現 (漢語) を直接引用するときに 〈 〉 でくくって表す。

例で：を見かける。これは一定の条件下にある与格の形式である (pp. 195-196)。確かに、条件にあう与格の形式は長母音に見えるが、これは先行母音を繰り返すなどの記述²で、音韻体系との整合性をはかるなどの工夫が必要であっただろう。

歴史的変化を記述するにあたって、著者は藏文の転写までも音標文字を用いている。中国では、このような方法は以前からも行われてきており、新規性があるものではなく、また言語学的研究として、このような転写法は受け入れられる。しかしながら、Wylie 転写における'を著者が n と転写しているのには戸惑いを隠せない。'は、単子音としては鼻腔共鳴を伴わない摩擦音、子音連続における第 1 要素としては前鼻音に対応することが多い。ゆえに、単子音までも n と転写するのは読者を戸惑わせる上、転写の正確性の面からも受け入れがたい。音標文字を使うなら、fi が無難であっただろう（江荻(2002)を参照）。さらに、藏文 wa zur を w と上つきで転写している。転写の目的としては、これも理解が困難である。このような問題があるものの、音標文字による転写はチベット系諸言語以外の専門家も文語形式と口語形式の音対応を把握しやすいという利点がある。なお、著者はこの音対応を mDungnag 方言の「文語形式から音変化」として扱っている (pp. 34-58) が、上に述べたように、これは音対応であって、音変化の実態として理解するのは無理がある点に注意喚起しておきたい。著者は「(文語形式) > (mDungnag 方言形式)」のように記述しているが、厳密には歴史的変化を表す > は用いるべきではない。

特殊な変化とは、共時的な変異のほか、それと藏文との特別な対応関係についても記述している。具体的には初頭子音については破擦音の摩擦音化、非両唇閉鎖音・摩擦音と摩擦音の円唇化、有声音の無声音化、無声音の有声音化、第 2 音節の弱化、有気音と無気音の交替、母音＋末子音形式については文語末子音 s と後続初頭子音 p の音位転換、鼻音末子音の脱落、鼻音末子音の添加など 23 個の個別事例を列挙している。加えて、単独語と複合語での同一音節の異なる音声実現、方言の混合についての記述がある。初頭子音に関する現象は特殊とはいえまとまった例が認められるが、それ以外は個別事例が多く、定式化するのは困難という点で、初頭子音とは異なっている。

連続音変化とは、音節の連続において、特に語中における後続音節初頭の子音連続の音節境界があいまいになる事例を解説している。これについて、著者の音表記法から見ると、初頭子音連続の第 1 要素は上つきで標示されるが、pp. 68-71 の記述 (p. 33 にも同様の例示がある) を見る限り、音声学的には語中における後続音節初頭の子音連続は先行音節の末子音となるが、表記はそれぞれ単独の音節と同じく、上

²このようにすると、体系的に与格形式に独立したグロスを与えることができるという利点もある。海老原(2019)の分析を参照。

つきが維持される。この子音要素は音節境界が変更される途上にあると理解できるが、これを音韻論上きっちりした枠組みで扱っていないのは惜しいところである。

本書の記述、特に長編資料の表記は実際の発音に基づいているため、一部の語彙形式で第2章の記述とは異なる表記が認められる。また、同一の語についても異なる音声実現があり、それを記述に反映させている。資料的価値から言えば、この方法に賛同できる。ただし、第2章の記述は音韻分析の方法に焦点を当てて述べているため、音声現象について言語資料の記述に見られる現象をもれなく記述しているわけではない。どのような変異があるのか一覧表があれば、読者は疑問をもたずに済むであろう。

3 形態統語

形態統語に関する記述は第3章から第10章までで、本書の中核をなす部分である。注意したいのは、語の記述からではなく、第3章に統語（語順）の概況が記されている点である。これは語の記述（第4～6章）のあとに配置しても問題ないものであろう。第3章の内容は記述文法において必要不可欠であるが、著者はこれを第3章に配置することについて説明していない。これについて著者はその目的を簡潔に記すべきであっただろう。

第4章は語類とその記述である。mDungnag 方言の語類は大きく名詞類と動詞類に分かれ、これらに副詞、接続詞、閉じた語類、語の派生が続く。本章では簡潔を旨として記述しているようであるが、指示詞・代名詞の項目 (pp. 85-106) は突出して記述が多い。これらの語は格・数などによる語形変化も含むため、記述には相応のページ数が必要となる。そうであるなら、動詞の屈折 (pp. 112-113) について、その詳細を第10章 (pp. 312-319) に後回しにするのではなく、ここで述べてもよかったものと思われる。著者は動詞の形態変化について、特に蔵文との対応関係を明らかにすることに注意しているが、それは付録で行うだけで十分ではなかっただろうか。また、本章は形態論を中心に述べられるため、動詞の分析についても形態論的特徴に基づいて分類されている。特に、TAMを表す範疇を形態別に分離して述べているのは、第6章の記述の方法とは異なっているため、相互をつなぐ概要部分があってもよかったと考えられる。

第5章は名詞とその形態を議論する。具体的には、生物性（生物学的な性）の派生、指小表現の派生、親族呼称、定性標識、数標識、格標識、比較標識、話題標識、焦点標識を扱う。最初の2点は派生の手段を記述しているが、親族呼称は固定された呼称に a- という接頭辞が見られることを報告する。定性には不定標識と定標識があり、文法上義務的ではないものの頻繁に出現することを記述している。数には単

数、双数、複数があるとするが、p. 184において双数標識は完全には接辞になっていないことを述べる。はたして双数は数範疇として記述すべきであろうか。これはチベット系諸言語における問題でもある。格としては、ゼロ標識となる絶対格を含め7種を認めている。ここで著者は比較標識を格標識とは別に扱っているが、それについて、離格、位格と同形の標識を最も頻繁に用いると述べる。比較対象を表す標識にはほかの形態もあるが、なぜ比較標識を格組織（比較格）に組み込まないかについては、解説がほしいところである。話題標識と焦点標識は、最も頻繁に用いられるのは同一の形態である。形態論上は分離する必要はなく、両者を1つにまとめて、解説において話題と焦点の異なりを解説するほうが分かりやすいのではないか。

第6章は動詞とその形態を議論する。具体的には、アスペクト、否定、モダリティ、証拠性、向心性、驚嘆性、従属句、関係句を取り上げると述べている(p. 203)が、最後の2点は本章の記述にはない。当該の内容は第8章にある。本章で扱われる現象のうち、否定を除いては、チベット系諸言語の研究において記述・分析の方法が非常に多様に分かれているものである。しかしながら、記述研究であるためか、著者は異なる立場に十分触れることなく自身の分析を示しているか、自らの立場を支持する根拠にのみ言及がある点は、読者に不親切であるかもしれない。アスペクトについては、著者はテンスを考慮に入れない立場をとり、8つのアスペクトを認めている。なお、これらのアスペクトを表す形式は、その形態論的特徴が一様ではないことにも注意が必要である。このカテゴリーについては、相対テンスを主張する研究(Zeisler 2004)からテンス・アスペクトの複合(Tournadre & Sangda Dorje 2003)と考える研究もある。否定については、他のチベット系諸言語に一般的に見られる現象が記述される。モダリティについては、著者も指摘している(p. 219)ように、証拠性と重なる部分があるとするが、ここでは3つの下位分類を紹介している。証拠性としては、直接感知、推測、伝聞、引用の4つを記述する。向心性とは、海老原(2019)のいう「ウチ・ソト」の対立とほぼ共通する観点からの記述である。驚嘆性とは、特に DeLancey (1997) を引用し、その意味の核心は直接感知ではなく新情報であり、時に驚嘆の語気を伴うとする(p. 234)。著者も触れてはいるが、以上のモダリティ、証拠性、向心性、驚嘆性を証拠性の枠組みで一体化して記述する立場もある。評者は後者の立場でチベット系諸言語の文法の枠組みをとらえているため、著者の分析の立場には立たない。このため、評者は著者に自身の立場を支持する理論的根拠を期待したが、残念ながら評者を納得させるだけの記述は見当たらなかった。特に、著者が驚嘆性の枠組みについて、DeLancey (1997) のみを引用し、この論文に向けられた批判(Hill (2012) など)に言及していないのには不満が残る。評者は驚嘆性は語用論的な機能としては存在するが、それがカテゴリーとして存在することに

懐疑的である。また、本書に含まれる驚嘆性の標識を含む例文は数多いが、「直接感知ではなく新情報である」という著者の見方を支持できる例文は少ない。なぜ直接感知ではいけないのかを著者はもっと丁寧に記述するべきであった。また、向心性については、これが証拠性と異なるカテゴリーである理由について、これが情報源を表さないからだと述べている (p. 230)。これは証拠性の定義を Aikhenvald (2004) に基づいているためであると考える。チベット系諸言語における証拠性については、Tournadre & LaPolla (2014) の、情報へのアクセス方法と情報源の2つを表すという再定義が文法体系の記述に役立つという主張があり、「向心性」は情報へのアクセスとして理解する。また、この枠組みでは、著者の言う直接感知も情報へのアクセスの一種であって、情報源ではない。しかし、向心性の記述において、著者は「発話者の情報への態度」(p. 230³) を反映するとし、この立場は Zeisler (2018) と共通する部分もあり、文法現象の重要な問題点を指摘している。ただし、著者の向心性は、Tournadre (2017) のいう証拠性の枠組みを形成する egophoric 「向自己」とともに、動作の方向を意図する cislocative 「発話者に向かって」も含み、両者を分離していない。本来この両者は分けて記述するべきである (Suzuki 2017)。なお、本章においてモダリティ以降の記述には長編資料とともに会話資料からのデータも取り上げて解説している点は評価できる。特に証拠性の記述においては、語りと会話というジャンルの差異が言語表現に反映される可能性もあるからである (Koshal 1979; 鈴木、四郎翁姆 2019)。ただし、本書の記述に基づく限り、mDungnag 方言において両者の間に特別な差異は現れないようである。

第7章は単文とその構成の記述である。具体的には、疑問文、判断文、所有文、比較文、使役文、否定文、話題の構造、焦点の構造の8種類を記述している。記述は簡明であり、分かりやすい。気になるのは、チベット系諸言語の記述として、判断文が繫辞動詞を用いた文として、それを単独で用いる形式と助動詞として用いられる形式の記述をまとめて扱い、所有文についても存在動詞を用いた文としてそれを単独で用いる形式と助動詞として用いられる形式の記述をまとめて扱っている点である。確かに、形式上は繫辞動詞語幹と存在動詞語幹を用いる点で共通ではあるが、これを判断文、所有文という文の種類と関連させて記述するのは奇特である。TAMの一部となっている繫辞動詞語幹と存在動詞語幹はもはや判断文と所有文ではないからである。一方、比較文が独立して取り上げられているのは興味深い。比較表現は定型があるものの、統語型表現 (格標示を使用) のほか、語彙型表現 (動詞「見る」を使用) がある。また、文語的表現が口語にも見られるとする (pp. 259-260) が、これは言語スタイルの問題であって、口語であるからといって、異なるスタイルを

³原文には「発話者」の代わりに「作者」とある。文意に沿って訂正して掲げた。

並列して記述する必要はなかったかと思われる。スタイルの違いは言語特徴全般にわたって現れるであろうから、独立した 1 章を立てるなどの工夫があったらよかったであろう。文法現象として重要な使役についても、本章で取り上げている。使役は単に文の構成の問題ではなく、動詞語幹の交替などの現象も含む。ただし、さまざまな文法現象によって章を分ける星 (2016) のようなスタイルであれば独立した章を設けることが適切であろうが、本書の構成に照らせば、適切な位置に配置されていると見てよい。否定については、形態とともにスコープ、二重否定にも触れ、的確に記述している。修辞疑問による語用論的否定についての記述がないのは残念である⁴。話題の構造については、話題の標識、話題を指示する演算子、語順について簡潔に記述している。焦点の構造については、さまざまな焦点の表現方法について記述している。文の構造のみならず、ストレスにも言及しているなど、周到である。

第 8 章は複文とその構成の記述である。具体的には、並列の構造、従属節連続の構造、副詞的従属節、関係節、補語補文の構造、連動の構造、準分裂構造の 7 種類を記述している。複文の構造の記述に当たっては、そのほとんどの例文を長編資料から取り、自然発話に見られる現象を的確に記述している。すなわち、本章の記述は長編資料に認められる複文の構造を余すところなく説明しているといえる。

第 9 章は文の機能における類型を記述する。平叙、疑問、命令、禁止、感嘆、勧誘、祈願の 7 種に分けている。平叙文と疑問文についてはすでに説明を行ってきたため、数行の解説に留まるが、それ以外の項目には例文が付されている。感嘆、勧誘、祈願は多くが文末小辞を用いて表し、文の構造に特別な違いは認められないことがわかる。

第 10 章は独立して動詞の形態変化を扱っている。先に述べたように、この分量であれば、語類の記述における動詞関連の部分に配置しても問題はないと考える。著者は蔵文形式との対応にも注意を払っている (pp. 312-313) ため、章を独立させたのであろうか。蔵文との対応については、付録 2 の動詞形態変化表はそもそも文語形式と mDungnag 方言の対照リストであるため、その解説部分に付すほうが、理解をより促進させることができるかもしれない。

4 まとめ

本書の記述を総合して考えれば、「研究」と銘打っているものの、著者の考える枠組みに従って執筆された記述文法の一つとみなすことができる。また、危機言語と明言しているように、話者数が極めて限られた環境の中での資料収集ではあるが、

⁴Tsering Samdrup & Suzuki (2019) を参照。

他のチベット系諸言語の記述文法に比肩する内容量と詳細さとなっている。言語構造の詳細な記述に加え、語彙とグロスつきテキスト訳注を1冊に収めている点で、チベット系諸言語の記述研究にとって模範となるといえよう。

言語特徴の分析においては、分析の理論的枠組みや著者の方法論についての記述が少ないのは残念であるが、そもそもチベット系諸言語の文法体系は、今なお分析の途上にあり、さまざまな考えとアプローチが共存している。このため、読者は単に著者の記述を無批判に受け入れるのではなく、別の観点からの分析方法もあることに注意が必要である。本書評では、若干の異なる枠組みをとる先行研究を盛り込み、読者の参考に供する形とした。

本書で提起された mDungnag 方言の所属問題についても、著者は一定の基準と議論の方向性を提出した。今後はその方向性を他のチベット系諸言語の資料を参考にしつつ、さらに詳細な考察が望まれる。

参考文献

海老原志穂 (2019) 『アムド・チベット語文法』 東京：ひつじ書房。

鈴木博之、四郎翁姆 (2019) 「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における口承文芸の記録と言語分析」『言語記述論集』 11, 17-38.

電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00003018/>

西田龍雄 (1970) 『西番館譯語の研究：チベット言語學序説』 京都：松香堂。

星泉 (2016) 『古典チベット語文法：『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて』 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

Aikhenvald, Alexandra (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

DeLancey, Scott (1997) Mirativity: The grammatical marking of unexpected information. *Linguistic Typology* 1, 33-52.

Gawne, Lauren & Nathan W. Hill (eds.) (2017) *Evidential Systems in Tibetan Languages*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Hill, Nathan W. (2012) “Mirativity” does not exist: *hdug* in “Lhasa” Tibetan and other suspects. *Linguistic Typology* 16, 389-433. DOI: 10.1515/lity-2012-0016

Haller, Felix (2004) *Dialekt und Erzählungen von Themchen: Sprachwissenschaftliche Beschreibung eines Nomadendialektes aus Nord-Amdo*. Bonn: VGH Wissenschaftsverlag.

邵明園（著）《河西走廊瀕危藏語東納話研究》廣州：中山大學出版社、2018年、10+450pp.

Häsler, Katrin Louise (1999) *A Grammar of the Tibetan Dege ཇེ་དགེ་ (Sde dge) Dialect*.
Zürich: Selbstverlag.

Koshal, Sanyukta (1979) *Ladakhi grammar*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Sun, Jackson T.-S. (2003) Phonological profile of Zhongu: A new Tibetan dialect of Northern Sichuan. *Language and Linguistics* 4.4, 769-836.

Suzuki, Hiroyuki (2017) The evidential system of Zhollam Tibetan. In: Gawne and Hill, 423-444.

Tournadre, Nicolas (2017) A typological sketch of evidential/epistemic categories in the Tibetic languages. In: Gawne and Hill, 95-129.

Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions to research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263. DOI: 10.1075/ltba.37.2.04tou

Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*. Deuxième édition. Paris: L'Asiathèque.

Tsering Samdrup & Hiroyuki Suzuki (2019) Humilifics in Mabzhi pastoralist speech of Amdo Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 42.2, 222-259. DOI: 10.1075/ltba.17008.sam

Zeisler, Bettina (2004) *Relative tense and aspectual values in Tibetan languages*. Berlin: De Gruyter.

—— (2018) Don't believe in a paradigm that you haven't manipulated yourself!: Evidentiality, speaker attitude, and admirativity in Ladakhi. *Himalayan Linguistics* 17.1, 67-130. DOI: 10.5070/H917136797

江荻 (2002) 《藏語語音史研究》北京：民族出版社。

受領日：2019年8月5日
受理日：2019年10月17日